

冷戦期アメリカの批評における「不可知なもの」 ——「ダヴォス討論」とルネ・ウェレック¹

鈴木英明*

*昭和薬科大学 基礎薬学教育研究センター

“The Unknown” in Cold War American Criticism: “The Davos Dispute” and René Wellek

Hideaki SUZUKI*

*Education Center for Fundamental Pharmaceutical Sciences
Showa Pharmaceutical University

要 旨

「ダヴォス討論」その他におけるカッシーラーとハイデガーとの主たる対立点は、カント解釈をめぐる、感性と悟性の二元論と、構想力一元論との対立である。ハイデガーは、感性と悟性を統一する構想力＝想像力の根本に、「感性的理性」なるものを可能にする「不可知なもの」があると主張する。他方、冷戦期アメリカの中心的な批評家ウェレックのカント論を検討すると、ハイデガーのそれと不気味なまでに似ていることがわかる。ウェレックの説く比較文学の原理であるリベラルな想像力は、この「不可知なもの」と深いところでつながっている可能性がある。

キーワード

ダヴォス討論、カント、カッシーラー、ハイデガー、ウェレック

I. はじめに

1928年、第一次世界大戦後のヨーロッパ諸国の、とりわけドイツとフランスとのあいだの文化交流を主たる目的として、「国際ダヴォス会議」という組織体が設立された。その翌年、1929年の3月17日から4月6日にかけて、「国際ダヴォス会議」の第2回年次大会が開かれた。ヨーロッパ各地から知識人が集まったこの大会における最大の呼び物は、Ernst Cassirer (1874-1945) と Martin Heidegger (1889-1976) との討論だった²。当時カッシーラーは、主著となる『シンボル形式の哲学』第一巻「言語」(1923)、同第二巻「神話的思考」(1925)を出版しており、後ほど述べるように、新カント派的な「認識(理性)批判」を「文化批判」にまで原理的に拡大するという野心的な試みを推し進めていた。他方ハイデガーは、最終的には未完に終わったものの、20世紀で最も重要な哲学書ともいわれる『存在と時間』を1927年に出版し、ダヴォス討論が行われた年に出版された『カントと形而上学の問題』(1929)のもとになる講義を行っていた。新カント派の流れをくむ、当時のドイツを代表するユダヤ系哲学者カッシーラーと、特異な相

貌をみせ始めたカリスマ的な哲学者ハイデガーとが交わした討論は、その後の人文学の歴史において、形を変えてさまざまに反復されているように思える。本稿では、ナチスが台頭しつつあったヨーロッパでの出来事である「ダヴォス討論」と、冷戦期における北米の批評とのかかわりを、ウィーンでチェコ系の家に生まれ、第二次世界大戦が始まる直前にドイツ語圏からアメリカに移住した批評家 René Wellek (1903-95) の著作を通して考えてみたい。

II. カッシーラーのカント解釈

ダヴォス討論の主たる争点は、カント解釈をめぐるものだった。実際、この討論は、以前から新カント派を批判していたハイデガーに対するカッシーラーからの質問、「ハイデガーは、新カント派という名のもとに何を理解しているのでしょうか」という質問で口火が切られる。そしてカッシーラーは、討論の終盤において、ハイデガーのカント解釈に部分的に同意しながらも、カントのいう「コペルニクスの転回」についてはハイデガーとのあいだに決定的な理解の違いがあると述べる。

「ハイデガーは、彼の形而上学の根本問題が、プラトン、アリストテレスが規定したものと同一問題、すなわち、存在者とは何か、であると語った。さらに彼は、カントが、全形而上学のこの根本問題と再び結びついている、と語った。これについては、いうまでもなく私も同意する。だがここには、とりわけカントがコペルニクスの転回と呼んだものについては、本質的な理解の差異が存するように思われる。(中略) カントは次のように言う。「これまでひとは、認識が対象に準拠せねばならないと想定していた。しかしいまや問題を逆に試みてもよい。我々の認識が対象に準拠しなければならないのではなく、対象が我々の認識に準拠しなければならないとしたらどうであろうか」。(カッシーラー&ハイデガー 42; 下線は引用者による。以下同様)

カッシーラーは、引用の後半にあるように、『純粹理性批判』におけるカントの言葉を引き、その後、この「コペルニクスの転回」を自分がどう理解しているかを述べていく。ここでは、ダヴォス討論におけるカッシーラーの発言だけでなく、『シンボル形式の哲学』なども参照しながら、カッシーラーのカント理解が、彼の文化哲学や神話的思考に関する研究といかにかかわっているのかをみておきたい。

カッシーラーは、『シンボル形式の哲学』第二巻「神話的思考」において次のように述べている。

批判哲学の第一の本質的見解によれば、対象はすでにできあがり固定されたかたちで、つまり、そのあるがままの即自態において意識に「与えられる」ものではなく、表象の対象に対する関係は意識の自立的自発的な作用を前提にしている。つまり、対象とは〔感性と悟性との〕総合的統一にさきだつて、またその外に存在するものではなく、むしろ総合的統一によつてはじめて構成されるものであり、——対象とは意識に単純に捺しつけられ、刻みつけられてできる捺し型などではなく、意識の基本装置、直観〔感性〕と純粹思考〔悟性〕の諸条件の力を借りて果たされる形成作用の所産だ、ということになる。「シンボル形式の哲学」は批判主義のこの根本思想、カントの「コペルニクスの転回」の拠つて立つこの原理を採りあげ、さらに

拡大しようとするものにほかならない。(カッシーラー、第二巻 75；〔 〕内は引用者による。以下同様)

カントのいう「コペルニクスの転回」についてカッシーラーがここで述べていることは、一般的なカント解釈とほぼ同じものである。カントによれば、私たちは、対象をあるがままに認識・経験するのではなく、経験を可能にする、経験に先立つ条件、つまり経験の超越論的条件にしたがって、現象としての対象を認識する。経験・認識を可能にする条件とは、時間と空間というア・プリオリな直観の形式にしたがって、多様な感覚的データを受けとる能力である感性であり、もう一つは、ア・プリオリなカテゴリー（純粹悟性概念）によって、こうした多様な感性的データに統一を与える能力である悟性である。上記の引用にある「総合的統一」とは、認識を可能にする感性と悟性の統一、両者の協力・協調のことを指している。そして、こうした感性と悟性との協調によって可能となる認識の対象を、何よりも自然科学の対象と考えたこと、これが新カント派の特徴の一つである。カッシーラーは、こうした新カント派のカント解釈、そして認識をめぐるカントの批判哲学を、自然科学の領域から芸術や神話といった文化の諸領域へと拡大することを目指す。

精神の真の根本機能はすべて、単に模写するだけではなく、根源的に像^{ビルド}を形成する力を内蔵するという決定的な特徴を、認識と共有している。精神の根本機能は、ただ受動的にそこにあるものを表現するというのではなく、内に精神の自立的エネルギーを蓄えており、このエネルギーによってただ存在するだけの現象がある特定の「意味」、ある独自の理念的内容を受けとることになるのだ。このことは、認識にとってと同じく芸術にも当てはまり、宗教にも神話にも当てはまる。これらはすべて、それぞれ独自の像^{ビルト・ツヴェル}=世界のうちに生きているのであるが、この像=世界は経験的所与の単なる反映ではなく、むしろ認識・芸術・宗教・神話がそれぞれにある自立的原理に従って産出するものなのである。(カッシーラー、第二巻 28)

この引用は、カントの「コペルニクスの転回」を様々な文化の領域へと拡大するカッシーラーの試みを明確に示している。「認識批判から文化批判へ」というカッシーラーのテーゼは、以上のようなことを意味しているのである。

Ⅲ. 文化哲学 vs 現存在分析

認識論の領域にとどまらない、芸術や神話も含めた文化形成の問題を扱うカッシーラーの文化哲学に対して、ハイデガーはすでに『存在と時間』の注において疑義を呈している(『存在と時間』上巻 128)。そして「ダヴォス討論」においては、カッシーラーの文化形成の問題は自分の問題とは相容れないものであると述べている。

もしひとが『存在と時間』における現存在分析を人間に関する研究として或る閉じたものと想定し、この人間理解に基づいていかにして文化および文化領域形成の了解が可能であるかと問うのであれば、すなわち、問いを文化および文化領域形成の問題として立てるのであれば、現存在分析から何かを語ることは絶対に不可能であると認めよう。これら「文化形成」の問題はすべて私の中心的な問題と全く適合しない。(カッシーラー&ハイデガー 29)

では、ハイデガーの中心的問題とは何か。それは端的に言えば、存在とは何かと問う存在者、すなわち現存在の分析を通して、存在の根源的な意味を解明することである。こうした存在論的な基礎づけがまずなされないならば、カッシーラーの文化哲学は様々な文化領域のたんなる記述にとどまってしまう、そうハイデガーは述べる。

カッシーラーは最初の講演でterminus a quo〔起点〕とterminus ad quem〔目標点〕という表現を使った。カッシーラーにおけるterminus ad quemは、形成的意識の諸形式（中略）の全体性の解明という意味での文化哲学の全体ということになる。カッシーラーにおけるterminus a quoは全く蓋然的〔問われるべき〕である。私の立場は逆である。terminus a quoが私の中心の問題構成であり、私はこれを展開している。問題は、私の場合terminus ad quemは明瞭であるか、ということである。私にとってそれは文化哲学の全体のうちではなく、（中略）そもそも存在とは何か、という問いのうちにある。（カッシーラー&ハイデガー 345）

ハイデガーからすれば、もしも文化の形成について問うとするならば、まずもって、その問いが立てられる起点・出発点の分析から、つまり世界のただ中に投げ出されて在り、死に向かう存在者である現存在の分析から始めなければならない。しかし、上の二つの引用にあるように、ハイデガーが展開するそうした現存在分析は、文化形成の問題とはまったく無関係であるとされる。カッシーラーの文化哲学とハイデガーの存在論哲学とは、問いの立て方が根本的に異なっているために、両者の議論は完全にすれ違うことになる³。

IV. ハイデガーのカント解釈とカッシーラーからの批判

ここでカント解釈に関する問題にもどりたい。なぜならば、カント解釈という限定された場でのカッシーラーとハイデガーとの違いは、たんなるすれ違いではなく、同じ土俵の上での対立と考えられるからだ。そしてさらに、この対立には、ドイツのワイマール体制を支持するリベラルなユダヤ人哲学者と、後にナチズムに加担することになる哲学者との対立という、経験的な水準におけるものとは別の政治的含意が読み取れるように思えるからである。カッシーラーのカント解釈についてはさきほどみた。そこで今度は、ハイデガーのカント解釈の要点を、ダヴォス討論の後、ほどなくして出版された『カントと形而上学の問題』を中心に、できるだけ簡潔にまとめておきたい。

先ほど、カッシーラーの『シンボル形式の哲学』第二巻からの引用に関連して述べたように、カントによれば、人間の認識は、感性と悟性との協調・協力によって可能となる。すなわち、時間と空間というア・プリオリな直観の形式にしたがって多様な感覚的データを受け取る能力である感性と、ア・プリオリなカテゴリー（純粋悟性概念）によってこうした多様な感覚的データに統一を与える能力である悟性、この二つが協調することで認識は可能になる。ハイデガーは、まったく異種的で性質の異なる感性と悟性とがなぜ協調できるのかと問い、そこには両者を媒介する「図式」が働いているからだ、というカントの言葉を引用している。

純粋悟性概念〔カテゴリー〕が〔感性的〕現象とまったく異種的であり、しかもやはり〔感性的〕現象を規定すべきであるとすれば、その場合この異種性を橋渡しする媒介者が存しなくてはならない。「このような媒介的表象は純粋（あらゆる経験

的なものを含まない)で、しかも一方では知性的〔悟性的〕、他方では感性的でなくてはならない。このような表象が超越論的図式である。」(『カントと形而上学の問題』115-16)

そしてハイデガーは、こうした図式は超越論的構想力(構想力の原語はEinbildungskraft、英語ではimagination)が作り出したものであるというカントの言葉を引き、さらに、超越論的構想力とは、たんに感性と悟性とを媒介する中間的な能力であるだけでなく、感性と悟性とを統一する「根本能力」とであると述べ、『純粹理性批判』第一版(1781年)から次の一文を引用している。「われわれは、あらゆるアプリアリな認識の根底に存する人間の根本能力として、純粹構想力をもっている。」(『カントと形而上学の問題』136)ハイデガーも引用しているように、カントは『純粹理性批判』の序論において、「おそらく共通の、しかしわれわれには知られない根から発する二つの幹つまり感性と悟性がある(後略)」と述べているが、ハイデガーは、構想力という根本能力こそが、感性と悟性という二つの幹の元にある「われわれには知られない根」であると論じている。しかしカントは、『純粹理性批判』第一版における、感性と悟性と統一する根本能力として構想力を提示した箇所を、第二版(1787年)においては削除してしまった、そう指摘するハイデガーは次のように述べる。

この根源的な、超越論的構想力に「根ざす」人間の本质体制は、カントが「われわれには不可知な根」について語ったときに彼が覗きこまなければならなかった「不可知なもの」である。なぜならば不可知なものは、けっしてわれわれがそれについて端的に何も知らないものではなく、認識されたものにおいてわれわれを不安ならしめるものとして押し迫ってくるものだからである。しかしカントは超越論的構想力のより根源的な解釈を遂行しなかった。(中略)その反対に、カントはこうした不可知な根から撤退している。(『カントと形而上学の問題』159-60)

『純粹理性批判』第一版における、感性と悟性を総合する根本能力としての構想力という考え方は、六年後の第二版では消されてしまい、そうした総合の機能は悟性に移されている。つまり、感性と悟性の協力・総合を悟性自身が主導する、という主張に変わっている。その理由は、ハイデガーによれば、カントは構想力を感性の一式だと明確に述べており、悟性やその上にある理性よりも低級な認識能力であるとされてきた感性的な構想力を認識の根本に据えるならば、認識能力の秩序が混乱してしまうのではないかと、そうした不安をカントが感じたことである。さらには、感性と悟性を総合する構想力を根本に置くと、カント哲学の基本的な構えである感性と悟性の二元論が構想力一元論に変わってしまうということがある。先に述べたとおり、その一元論の根本にある構想力は感性的な能力であり、さらにハイデガーは、そうした構想力は「感性的理性」なるものを可能にするものであると述べている。(『カントと形而上学の問題』170)

カッシーラーは、ハイデガーの『カントと形而上学の問題』に対する1931年の書評において、いまみた構想力一元論および感性的理性に傾くハイデガーのカント解釈とその「暴力」に強く異を唱えている。

Nowhere does Kant contend for such a monism of imagination. Rather, he insists upon a decided and radical dualism, the dualism of the sensuous and intelligible

world. . . .

[T]he concept of reason that is . . . a “pure sensuous reason” could not in fact be conceived by Kant in the sense that Heidegger gives to it. This concept becomes intelligible only in terms of the fundamental assumptions of Heidegger’s problem— in terms of his analysis of *Being and Time*. But in Kant’s doctrine it remains a stranger and an intruder. For Kant, such a “sensuous reason” would be a wooden iron. . . . Here Heidegger no longer speaks as commentator but as usurper, who penetrates, as it were, by force of arms into the Kantian system in order to subdue it and make it serviceable for his problem. (Cassirer 148-49)

理性を感性化し、合理的判断を非合理的「決断」によって否定する原理となりかねない感性的理性 (sensuous reason) という概念などカントとは無縁であると、カッシーラーは言いたいのだ。ハイデガーは、カントの哲学体系の中に「武力によって」侵入し、カント哲学を「征服」して自分の問題意識に従わせようとする「篡奪者」である、そう述べるカッシーラーの言葉には、切迫した政治的危機意識すら感じられる。

V. 「ダヴォス討論」と (ポスト) 構造主義

これまでみてきたことから、カント解釈をめぐるカッシーラーとハイデガーとの対立は、感性と悟性の二元論vs構想力一元論という対立、啓蒙主義的理性vs構想力に基づく「感性的理性」という対立、もしくは、理性的合理主義vs理性的非合理主義という、政治的理念の違いをも含意しうる対立であると言えるだろう。あるいはまた、両者の対立は、冷戦期のヨーロッパにおける構造主義とポスト構造主義との対立を先取りしていると言えるかもしれない。というのも、カント哲学を神話などの文化の領域にまで拡大するカッシーラーは、プリミティヴな民族の神話に合理的精神の働きを見出すレヴィ=ストロース、つまり、ポール・リクールによって「超越論的主体なきカント主義」(Ricoeur 55) と呼ばれたレヴィ=ストロースの構造主義人類学とカントを通じてつながっており、他方で、フランスの「ポスト構造主義者」と大雑把にくくられる思想家達にハイデガーが与えた影響の大きさについては、ここで改めて指摘するまでもないからである。また逆に、冷戦期のヨーロッパにおける構造主義とポスト構造主義には、「ダヴォス討論」が反映している、よりはっきり言えば、戦後におけるハイデガーの復活とそれへの反発という事態が反映していると言えるだろう⁴。

VI. ルネ・ウェレックのカント論

しかし、冷戦期においてヨーロッパから構造主義とポスト構造主義を輸入したにもかかわらず、アメリカの批評は「ダヴォス討論」から、つまりカント解釈をめぐるカッシーラーとハイデガーの議論から、ほとんど影響を受けていないようにみえる。カッシーラーは、イギリス、スウェーデンを経て1941年にアメリカに移住し、イェール大学やコロンビア大学で教鞭をとるが、1945年に急逝し、アメリカにおけるカッシーラーの影響力の範囲は、スザンヌ・ランガーらを除けば限定的である。他方ハイデガーについては、戦後アメリカにおける、サルトルを中心とする実存主義の流行のなかで、「実存主義の祖」という扱いは受けるものの、その危うい魅力を湛えた存在論・解釈学を正面から論じた批評家は、ポール・ド・マンを例外としてほとんどみあたらない。しかし、冷戦期のアメリカにおける「ダヴォス討論」の不在は、いわば「不在の現前」とでも言うべき

ものであり、何かの徴候であるように思える。ここで、この「不在」の意味を考えるために、アメリカ冷戦期の批評の中心人物の一人であるRené Wellek (1903-1995) を導入したい。なぜならば、ドイツ語とチェコ語のバイリンガルであるウェレックのデビュー作である、プリンストン大学出版局から刊行された*Immanuel Kant in England 1793-1838* (1931) は、カント哲学をテーマとし、「ダヴォス討論」の2年後に出版された書物であるにもかかわらず、カッシーラーにもハイデガーにも一言も言及しておらず、この不在がやはり何かの徴候に思えるからである。ただ、この書物がイングランドにおけるカント受容の歴史を扱ったものであることを思えば、ここで「ダヴォス討論」が言及されないのも当然なのかもしれない。しかし、この書物のイントロダクションにおける、ドイツの新カント主義 (German Neokantianism) への言及を目にするとき、ウェレックのこの著作が「ダヴォス討論」と議論の背景を共有していることが感知されるのである。

I have learned most about Kant either from such faithful interpreters as Norman Kemp Smith, E. Adickes, Bruno Bauch, Hans Vaihinger, or from those who in Kant have recognized the germs of the whole later development of idealism which culminated in Hegel. The wide-spread interpretation given by German Neokantianism I reject as unhistorical. (Wellek, 1931; VI)

新カント派を拒絶するウェレックのこの強い断言は、ここでは言及されていないハイデガーを想起させる。もちろん、ウェレックが「イングランドにおけるカント受容史」という場合の「歴史」と、ハイデガーの『存在と時間』における「歴史性」とは根本的に異なるものだろう。しかし、新カント派のカント解釈を峻拒する口調の厳しさにおいて、両者はやはり似ているように思われる。この類似性について考えるには、イングランドにおけるカント受容の歴史ではなく、ウェレック自身のカント解釈の内実をみなければならぬ。

ウェレックは、Austin Warrenとの共著である*Theory of Literature* (1949) をはじめとする著作において、しばしばカントに言及しているが、正面からカントを論じたものとしては“Immanuel Kant's Aesthetics and Criticism”(1957)がある。ここで興味深いのは、ウェレックがハイデガーと同じく、カントの構想力 (imagination) に注目していることである。

[O]ne of the key terms which he [Kant] introduces, his “aesthetic Idea,” raises many difficulties. This “Idea,” he knows, is not identical with general idea or concept. An aesthetic Idea is a representation of the imagination which has the semblance of reality. . . . “Idea” points to a pervasive problem of Kant's *Critique*, the union of the general and the particular, the abstract and the sensuous, achieved by art. (“Immanuel Kant's Aesthetics and Criticism” 126)

Art and organic nature point to an ultimate overcoming of the deep dualism which is basic to Kant's system of thought. . . . (Wellek, 1970; 130)

上の二つの引用にあるとおり、ウェレックは、美という理念 (aesthetic Idea) は構想力 (imagination) を表象するものであり、こうした理念あるいは芸術は、カントの批判哲

学の基本的な構えである二元論を克服するものだと述べている。ただ、ハイデガーが重視する構想力は『純粹理性批判』におけるものであり、これに対してウェレックが重視する構想力は『判断力批判』におけるものであるという違いはある。しかし、両者の構想力はやはり、悟性 (the abstract) と感性 (the sensuous) とを統一・綜合するという点で同じ働きをしていると言える。興味深いのは、上の引用や、次の引用で言われているように、ウェレックがカントの構想力に、一般的なもの (the general) と個別的なもの (the particular)、あるいは普遍性 (universality) と個別性 (particularity) とを統一する機能を見出しているところである。

Surely one of the criteria of all art is some kind of unity in diversity, some kind of coherence, wholeness, or whatever else one may wish to call it. Kant's view of the relation between particularity and universality seems also right even today. (Wellek, 1970; 141)

ウェレックはカントの構想力に、個別的なものを、その多様性を消してしまうことなく一般性 (ないしは普遍性) の中へと包摂する有機的機能を見出している。

Ⅶ. 比較文学の想像力=構想力

さらに注目すべきは、ウェレックが、上記のような構想力=想像力あるいは芸術の包摂機能を、冷戦期における比較文学の原理としていることである。

Once we grasp the nature of art and poetry, its victory over human morality and destiny, its creation of a new world of the imagination, national vanities will disappear. Man, universal man, man everywhere and at any time, in all his variety, emerges and literary scholarship ceases to be an antiquarian pastime. . . . Literary scholarship becomes an act of the imagination, like art itself, and thus a preserver and creator of the highest values of mankind. (Wellek, 1963; 295)

Comparative literature surely wants to overcome national prejudices and provincialisms but does not therefore ignore or minimize the existence and vitality of the different national traditions. We must beware of false and unnecessary choices: we need both national and general literature, we need both literary history and criticism, and we need the wide perspective which only comparative literature can give. (Wellek, 1970; 295)

上の二つの引用から読み取れるように、ウェレックのいう比較文学は、想像力を行使し、さまざまなナショナルな文学を、その伝統や個別性を失うことなく文学一般のなかに包摂する。しかし、冷戦期のアメリカの大学における比較文学の教育・研究が、「国家防衛教育法 (the National Defense Education)」(1958年に成立) によって財政的な支援を受け、国家防衛に資する学問であるとみなされていたことを考えれば⁵⁾、さまざまなナショナルなものを包摂する比較文学のリベラルな想像力それ自体が、アメリカというナショナルなものを体現していることは明らかである。

VIII. 結論

ハイデガーがカントに見出した構想力、感性的理性、あるいは非理性的理性は、カントがそこから撤退したとされる「不可知なもの」につながっていた。逆に言えば、この「不可知なもの」は理性を感性化する一元論の根拠であり、新カント派のカッシーラーはこれを強く批判した。他方、新カント派を拒絶するウェレックが冷戦期アメリカにおける比較文学の原理とした、普遍性と個別性を統一する構想力＝想像力も、カントの二元論を克服し一元論へと向かうものだった。啓蒙的理性を重視する新カント派を否定するウェレックのいう構想力＝想像力は、リベラルな装いを身にまといながらも、ハイデガーのそれと不気味なまでに似ているのである。冷戦期アメリカにおいてウェレックが唱道する、ナショナルなものを包摂するジェネラルな比較文学は、表面的にはハイデガーとは無縁であるように見えるが、その深いところで「不可知なもの」につながっている可能性がある。さらにこうしたつながりについて精査し、かつこれを根本的に批判しようとするならば、冷戦期のアメリカにおいてハイデガーを正面から論じたポール・ド・マンの批評を再検討する必要があるだろう。

注

- 1 本稿は、日本英文学会関東支部第5回大会シンポジウム「冷戦期ナショナリズムの諸相」（2011年、慶應義塾大学日吉キャンパス）において読まれた原稿に若干の修正を施したものである。
- 2 この討論を取り巻く当時の雰囲気や、ザフランスキーは以下のように記述している。「大きな出来事であった。外国のジャーナリストたちもやって来ていた。哲学に一家言もつ者はこの場に列席するか、そうでなければ下界で少なくともその報道記事を読んでいた。（中略）ダヴォスの山上会議の直後、彼〔カッシーラー〕はハンブルク大学の学長になっているが、これはドイツの大学でユダヤ人が学長に選ばれた初めての事例である。カッシーラーは公然と〔ワイマール〕共和国を支持していて、反動的な教授たちの憤激を買っていただけに、このユダヤ人学長の誕生は注目すべきことであった。（中略）彼が学長に選ばれたことは、リベラルな精神の勝利とされてハンブルクだけではなくドイツ全土で祝われた」（ザフランスキー 275-76）。また、ダヴォス討論に関する近年のすぐれた研究としてはGordonを参照。
- 3 ハーバーマスは『哲学的・政治的プロフィール』において次のような意味のことを述べている。すなわち、ユダヤ人に対する反感が高まりつつあったワイマール期のドイツにおいて、根無し草とみなされていたユダヤ人は、ドイツの人文主義的「文化」を盾にして身を守ろうとした、と。（ハーバーマス 68-9）「文化哲学」に対してハイデガーが抱く反感の背景にはこうした事情もあるのかもしれない。
- 4 ハイデガーは1946年から三年間、フランス当局によって大学での講義を禁じられていた（ザフランスキー 650）。
- 5 比較文学研究・教育が「国家防衛教育法」により財政的な支援を受けていたことは、「アメリカ比較文学会（ACLA）」が1965年にHarry Levinを中心にまとめた方針、いわゆるLevin Reportに記されており（Levin 21）、このレポートにウェレックも署名している。

参考文献

- Cassirer, Ernst. "Kant and the Problem of Metaphysics." *Kant: Disputed Questions*. Moltke S. Gram. Chicago: Quadrangle Books, 1967. 131-57.
- Gordon, Peter E. *Continental Divide: Heidegger, Cassirer, Davos*. Cambridge: Harvard UP, 2010.
- Levin, Harry. "The Levin Report, 1965." *Comparative Literature in the Age of Multiculturalism*. Ed. Charles Bernheimer. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1995. 21-27.
- Ricoeur, Paul. "Structure et Herméneutique." *Le Conflit des Interprétations*. Paris: Édition du Seuil, 1969.
- Wellek, René. "Immanuel Kant's Aesthetics and Criticism." *Discriminations*. New Haven: Yale UP, 1970. 122-142.
- . *Immanuel Kant in England 1793-1838*. Princeton: Princeton UP, 1931.
- . "The Crisis of Comparative Literature." *Concepts of Criticism*. New Haven: Yale UP, 1963. 282-95.
- . "The Name and Nature of Comparative Literature." *Discriminations*. New Haven: Yale UP, 1970. 1-36.
- . and Austin Warren. *Theory of Literature*. New York: Harcourt, 1949.
- カッシーラー、エルンスト. 『シンボル形式の哲学』第1巻～第4巻 生松敬三、木田元訳、岩波書店、1989年.
- カッシーラー&ハイデガー. 『ダヴォス討論』岩尾龍太郎・真知子訳、《リキエスタ》の会、2001年.
- ザフランスキー、リューディガー. 『ハイデガー—ドイツの生んだ巨匠とその時代』山元尤訳、法政大学出版局、1996年.
- ハイデッガー、マルティン. 『カントと形而上学の問題』ハイデッガー全集第3巻、門脇卓爾、ハルムート・ブフナー訳、創文社、2003年.
- . 『存在と時間』上下巻、細谷貞雄訳、筑摩書房、1994年.
- ハーバーマス、ユルゲン. 『哲学的・政治的プロフィール』(上) 小牧治、村上隆夫訳、未来社、1984年.